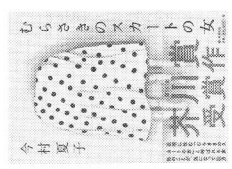


今村夏子『むらさきのスカートの女』 朝日新聞出版 本体 三〇〇円

「裏今村夏子」は足が速いらしい

阿部公彦



本作で今村夏子は第10回芥川賞を受賞した。すでにファンも多く、受賞に大

きな驚きはないが、中には本作に戸惑いを覚える人もいるだろう。あれ、今村さんって、こんな作家だっけ？と。

あの衝撃的な『こちらあみ子』を思い出してみよう。何らかの障害を持っていると思われるあみ子は、家族やまわりの人たちの感情を読み取れず、うまく付き合うことができない。でも、そう思っているのはまわりの人と、私たち読者だけ。本人は「うまく付き合うことができない」などとは思わない。ごくふつうのつもりなのだ。

そんなあみ子とはときにはコミックに、ときには痛々しく、ときにはびりりと神経に障るえぐみとともに描かれる。少年少女が

たくさんいる風景は牧歌的で、心温まる「いい話」として読みたくなる箇所も多数あるがそこには言いよらない苦みも埋めこまれているのだ。

この作品の強みは、おそらく語り手の——また小説や作家自身の——のろまさだろう。世界に立ち遅れている。遅れることで、あみ子の「心の文法」へと読者を導くのだ。こちらはつられて遅れるうちに、あみ子とともに、世界のあり方を突きつけられる。そして思わず笑い、びつくりするうち、じわつと熱いものや冷たいものをお腹のあたりに感じる。しかし、ふと気づくと、あみ子は私たちのそばにはいない。そこを、ひゅつと風が吹き抜ける。この「いない」感じがまた、あみ子ならではの。

この作家はどりやってあみ子という人物にたどり着いたのだろう。思はず溜息が出る。それくらいに『こちらあみ子』は奇跡

的な達成だった。よくぞ、あみ子の「いない」感じをとらえてくれた。『あひる』や『白いセーター』や『星の子』でも、そんなのろまさは生きている。主人公ものろま。私たちものろま。だから私たちは主人公を取り逃す。

ところが『むらさきのスカートの女』ときたらどうだ。実に俊敏なのだ。主人公の「むらさきのスカートの女」は、中高六年間陸上部で短距離走をしていたという。この「足が速い」世界は何なのだ。とても今村作品とは思えない。軽やかな語り手はひよひよと話をあやつり「なんちゃつて」と刺軽さを前面に出しながら、こちらがついていけないほどのスピード感で場面やセリフを繰り出す。

主人公は、いつも公園のベンチの同じ位置でクリームパンを食べている。若くはない。「頬のあたりにシミがほつほつと浮き

出ているし、肩まで伸びた黒髪はツヤがなくパサパサしている」。たしかに今村的だ。いつもの「変な人臭」だ。

ところが今回は、そこへ語り手がずかずかと入ってくる。「あちらが「むらさきのスカートの女」なら、こちらはさしずめ「黄色いカーティガンの女」といったところだ」などと口をはさむ。そして、知るはずのないことまで曝き出したり、不必要な（しかし、けっこうおもしろい）情報を垂れ流したり、ついには「むらさきのスカートの女」の鼻をつまんで「んがっ」と言わせたりする。それだけではない。不倫相手を殺してしまったと思こんだ「むらさきのスカートの女」の逃亡をお膳立てし、その後、ちゃっかり自ら「むらさきのスカートの女」の居場所を構取りしてしまう。

何という辣腕だろう。何という図々しさだろう。無口でおどおどして世界に立ち遅れるのろまさが旗印だったこれまでの語り手とは大違いだ。どんどん先回りし、過度な先回りゆえのおつちよこちよいさも辞さない。「むらさきのスカートの女はわたしの姉に似ていると思ったが、やっぱり違う」とか「違う」。思い出した。今度こそ

わかった。むらさきのスカートの女は前に住んでいた町のスーパーのレジの女の人に似ているんだって」などと軌道修正もお手の物である。

「黄色いカーティガンの女」を自称するこの語り手は、「むらさきのスカートの女」と友達になりたいという。だから、ストーカーのようにそのあとを追跡し、仕草を盗み見し、心理にも入り込む。まるで分身願望だ。

だいたい小説の語り手が、主人公の鼻をつまんで「んがっ」と言わせたりしていいのだろうか。ふたりは異なった地平に住んでいるのだ。だからこそ、先回りもできる。ところがこの語り手は、一つ上から見下ろすくせに、「むらさきのスカートの女」に肉薄し、同一化しようとする。しかも、それがけっこう成功する。

何と言つてもまずいのは、この作品にポストモダン小説によく見られる面倒くささや退屈さがほとんどないことだ。こんなに脱線と奇想とおつちよこちよいさにあふれるのに、違和感なくストーリーを追える。はじめは主人公は仕事もないように見える。ホテルの清掃係の職を得るものの、い

かにもきこえない。ところが自分がちよっかいを出す子どもたちとひよんなことから仲良くなり、あやしい身なりも改善。あれよあれよという間に職場にも順応。上司をたぶらかし、備品をくすね、仕事をさぼって客室で優雅なひとときをすごす。ところがやがて上司との関係がこじれ、その自宅に無言電話。あげくに自宅アパートの部屋の前で上司ともめ、二階から転落させてしまふ。何という通俗的で明瞭な筋書きだろう。

たしかに、これは今村夏子的ではない。しかし、あののろまな今村夏子の反転版、いわば「裏今村夏子」かもしれない。よく見ると、舞台装置はお馴染みだ。仕事を見つめるのに苦労する主人公。周囲の女によるいじめ。男とも結局、うまくいかない。要所で出てくる悪ガキども。そして、最後、「むらさきのスカートの女」は消えてしまふ。いないのだ。そこへひゅつと風が吹き抜ける。先回りし、逃亡のお膳立てまでしたあげく、主人公の不在を描く。この作品はたしかに、作家の次なる一步なのである。